

## 〔Ⅱ〕 これからの学校教育の課題

塩 田 芳 久

(昭和25年4月～同27年3月主事在任)

アメリカ大使館広報文化局から発行している「トレンズ」34号(1977年6月号)に、インディアナ大学の教育学教授のハロルド・G. シェインの『これからの教育に期待するもの』という論文が掲載されているが、その中に次のようなショッキングな文章がある。

「とかく学校というのは、まるで家畜の群れのように子供たちをオリの中に追い込み、画一的なテストを行なうところのようだ。いったいなぜ、一定の年齢の子供たちをオリの中に追い込んで画一的な行動をさせるという愚劣なことをしなければならぬのか、私には、その理由がのみ込めない。とくに、個性と自己の完成を目指したのがアメリカではないのか。……教育者や教育行政の担当者ときたら、ただ子供たちを学校というオリの中に追い込むばかりで、それぞれの個性や目標や才能、夢や不安には無関心といってよい。……」

このシェインの言葉は、わが国の教育界の現状にもよく当てはまるように思われる。「教育とは何か」「学校とは何か」が、今日ほど厳しく問われている時代はない。受験教育がもたらすさまざまな弊害は、いまや目を覆いたくなるばかりである。もしも、学校の教育が、本来の任務をなおざりにして、受験準備教育に狂奔しているとすれば、学校無用論がでてあながち暴論として片づけられないように思われる。

明治初期の学制発布以来、文明開化と殖産興業を柱とする富国強兵の国策遂行に果たした学校教育の役割のきわめて大きかったことは誰もが認めるところであろう。また、戦後の復興とその後の経済大国を目指す政府の基本政策に対しても、学校教育の貢献度はけっして小さくはなかったであろう。

しかし、だからといって、この世界的な大きい変動の時代の中であって、教育ことに学校のそれが旧態然としていてよい筈はないであろう。富国強兵時代の教育と高度成長時代のそれとは、戦前と戦後の違いがあり、制度や形式の上では大きい変革はあったが、その教育の本質は殆んど変わるところはないといえ過ぎであろうか。

戦後、アメリカから民主的な教育内容や教育方法が導入され、その当初は戦前の教育とは一味も二味も違った教育の発展が期待されたが、やがて高度経済成長への指向に伴って、教育の体制も次第に戦前のそれに逆戻りの傾向さえ認められるようになった。教師は教

科書の内容を忠実に解説し、生徒たちはそれらをテストの際に間違いなく再生できるように学習する、という昔ながらの指導法がまかり通っているのが現状ではなかろうか。

これまで、私は全国各地のかなりの数の小学校や中学校、それに高校の授業も参観してきたが、大正の終りから昭和の初めにかけて、私が四国の田舎の小学校や中学校(旧制)で受けた授業や評価とその本質はすこしも変わらないことを知って、教育界の根強い保守性にはいささか驚いているというよりはあきれている。もっとも、なかには素晴らしい教育実践を積み重ね大きい成果をあげている教師や学校もある。しかし、それらの成果もその教師や学校だけのもので、他に拡大しなかったり、また学校レベルの実践では、有能な指導者がいなくなると、元の木阿弥というのが一般的な傾向のようである。

ところで、いまや安定成長時代を迎え、国際関係もきわめて複雑な様相を呈し、世界は21世紀に向けて大きく進展している。こうしたときに、学校教育が目先のことに捉われて、受験のための詰め込み教育や切り捨て教育を何の反省もなく続けているならば、まことに憂うべき事態だといわなければならない。ことに、学校を立身出世の道具と心得る明治以来の一般的風潮はいっこうに衰えをみせず、有名校を目指す受験競争はわれわれの想像をはるかに超えている。予備校や学習塾の乱立は、この傾向をますます煽りたてている。いまにして、教育の在るべき姿を取り戻さなければ、古い言葉ではあるが、悔を千載に残すことになりはしないだろうか。

わが国教育界の現状とその批判は、これくらいにしておいて、次には今後の学校教育の在り方について若干の愚見を述べることにしたい。

最近、わが国においても、生涯教育論が提起され、いわゆる社会教育の拡充や大学の開放講座、放送大学講座、専修学校制度など、さまざまな試みがなされている。このことは、これまでの教育において占める学校の役割の比重が減少しつつあることを意味するといわれている。その通りであろう。しかし、それよりもっと重要なことは、このことが、従来ややもすると形式的、画一的、独善的、閉鎖的であった学校教育の在り方を抜本的に見直すべきことを強調するものと理

解することであろう。

そこで、まず最初に、学校は生徒たちを教育するところであって、かれらを支配したり、管理したりするところではないということである。最近の学校は管理七分に教育三分などといわれているが、管理は必要最少限にとどめたいものである。そうでなければ、管理ばかりで教育不在の学校という奇妙な事態になりかねない。生徒のため、学習のためと称して管理のしすぎはないであろうか。とくと反省したいものである。もっとも、自由放任が教育でないことも述べるまでもない。

次に、学校教育の重要な目標である基礎学力の問題についてである。これまで、基礎学力といえば、既成の教科指導の枠内での問題として、その内容や構造や測定などが主要な論点であった。しかし、21世紀に向けて大きく変動しつつあるこの重要な時代に、是非とも必要であると考えられるような新しい意味での基礎的学力はないであろうか。

さきのシェインも主張しているように、そのような学力の一つに「異文化の理解」ということがあげられよう。人間関係は教育や指導の基盤であると同時に、教育の重要な目標でもあるという認識のもとに、私は、ここ20数年来現場における教育問題の研究に取り組んできた。人間関係は他人を認め、他人の立場を理解することから始まるといえるが、この望ましい人間関係の教育は、相互理解にもとづく協力関係を確立し、共存共栄の社会の実現を目指すものであることは述べるまでもない。敵意や憎しみの関係からは、建設的な何ものをも生じないであろう。シェインも「……いまや地域社会や国家や国際社会などで、妥協や調和を図り、コンセンサスをつくり上げ、相互依存性をちかうことが重要になっている。これこそが、小は町の集会から大は国際連合にいたるまで人間社会での“必修科目”ではなかろうか。」と述べているが、おおいに参考すべき所論であろう。

いま一つ、今後の社会生活にとって必須の基礎的学力として、将来を展望する能力、すなわち、将来の出来事を想定し、そこから生まれる結果を予測するというような能力をあげることができる。このような能力の育成は、ややもすると目先の利害関係にとらわれて、将来の発展を見失いがちなわが国の一般的傾向からして、とくに重要な意義をもつものというべきであろう。

第三には、国語教育の充実という問題がある。国語の乱れは、その国の文化の乱れを示すものだといわれるが、わが国の現状はどうであろうか。マスコミの急速な発達に伴う情報化時代の到来はよいとしても、それに振りまわされるようでは問題であろう。国語教育

の基本は、正確な読解力と豊かな表現力の育成にあるといえるが、そのためには、基礎的な文字の学習や語力の訓練の重要性をおろそかにしてはならないであろう。最近の国語教育の実状は、私の参観した限りでは、文脈に即した正確な読み取りというよりは、物語り教材や文学的教材の鑑賞的学習に力点がおかれすぎているように感じられる。正確な読解力を前提にするのでなければ、本当の意味での鑑賞力も育たないのではなかろうか。

それぞれの民族や国家のもつ“ことば”には、その国特有の人間関係や思考様式が含まれ、物の見方や考え方が表わされている。つまり、“ことば”は、その国の文化の永い伝統の所産であり、自国語の正確な学習を基礎にして、はじめて異国語や異文化の正しい理解も可能となるではなかろうか。

最後に、二本建てカリキュラムの問題について私見を述べよう。最近、「ゆとりのある教育」論が提唱され、文部当局もそれに応えるかのように各教科の指導内容の精選や配当時間の節減などの方策を打ち出しているのは周知のとおりである。このような方策は、これまでの教育があまりにも多量の知識の詰め込み主義であっただけに、評価されてよいであろう。

さて、こうした方策の実施によって生じる“ゆとり”の時間をいかに有効に使用するかは、それぞれの学校に任かされているという。そこで、私は、二本建てカリキュラムの構想を提案したいのである。ぜひ慎重に検討ねがいたい。二本建てカリキュラムの一つは、従来どおりの学年制にもとづくカリキュラムであり、いま一つは、子供たちが自己の興味や関心や必要性に応じて自由に選択し学習することのできるアサインメント方式によるカリキュラムである。ここでは、学年を無視して、子供たちの能力や適性に応じた指導が可能であり、また、かれらの将来の進路指導にも大きい役割を果たすことができるであろう。

この構想は、大学教育における講義とゼミの二本建ての指導にヒントを得たものであり、現行のクラブ活動と類似する点もなくはないが、その主要な狙いが教科学習に関連した基礎的能力（学力）を充実することにあるという点では異なっている。さきに提案した二つの新しい基礎的学力（必須科目）の指導についても、この構想の中で研究することが可能のように思われる。

以上、これからの学校教育の課題として、四つの問題を提起した。このうち、新しい二つの基礎学力と二本建てカリキュラムの問題は、附属学校なればこそその提案であり、真剣にご検討いただければ幸甚である。それにしても、現状認識の甘さや説明不足のためにさまざまな誤解を招きはしないかをおそれる次第である。